

郷土愛がもたらす「村人」の連帯と対立

—ギリシャの山村におけるシロゴス活動の展開史—

内 山 明 子

ギリシャの国内移民について調べた Dubisch は、都市在住者も村にいる者も共に同じ村人意識で結ばれている点に注意し、従来の研究にみられる都市と地方という区分に対し異議をとなえた。⁽¹⁾ このような区分は、人々が自分達自身のコミュニティに対してもつ強烈な郷土愛を問題にするとき、注意を払う必要がある。村など地方のコミュニティを調査対象にしている場合、研究者達は、主に次の観点から郷土愛について言及してきた。すなわち、人々が郷土愛で結ばれる背景に他のコミュニティとの敵対関係があること、その文脈内では、人々は Banfield の言う amoral familism 的な対立関係⁽²⁾ を中断させ、強い連帯感を示すこと、そのさい、自分達や相手のコミュニティのイメージを歌やあだ名など様々な手段を使って表現することなどである。⁽³⁾ 一方、都市に関心をもつ研究者は、村から出てきた人々がまとまって住み様々な互助活動を行っている点に注目して、郷土愛の問題を取り扱っている。⁽⁴⁾

地方と都市という研究者側の設けた区分は、本来どこに住んでいようと関係なく郷土愛で結ばれている人々のまとまりを分解してしまっているといえるかもしれない。これを避けるためには、ギリシャ人自身が自分達のコミュニティの人間としてどんな人々を想定しているのか、その内部にどんな区分を設けているのかという emic な視点を導入する必要がある。

この点をふまえて、本稿ではギリシャの1山村 ^{Καλλονή} Καλλονή 村で展開してきた ^{δούλος} δούλος とよばれる活動とその歴史に注目したい。シロゴスとは、人々の郷土愛に訴えて支持を得、いろいろな公共活動を通して郷土愛を具

体的に表現するボランティア達のグループである。都市の移民達によってつくられたシロゴスについては、いくつか言及がなされているが、⁽⁵⁾ 地方に住む人々によってつくられたシロゴスについては、従来ほとんど報告されてこなかった。しかし、様々な所に住む者が、自分達のコミュニティのために活動を行うことで相互の連帯感を得る、その表現の場としてシロゴスを取り上げることができるのではないだろうか。ここでは、カロニ村のシロゴス活動の歴史を、それへの支持や反発といった人々の反応に注目して分析し、その中で、カロニ人 (Καλλονιώτες) なるものの定義およびその内部での emic な分類が、時代とともにどう変化していったかを取り上げていく予定である。⁽⁶⁾

I

ギリシャの北西部、アルバニアと国境を接する西マケドニア地方は、ピンドス山脈をはさんで西側に広がるエピルス地方と並ぶギリシャ有数の山岳地帯である。このあたりは昔から、牧畜と共に遍歴する職人達、とりわけ石工を中心とする建築職人の故郷として知られてきた。筆者がギリシャに留学中、1987年から89年にかけて毎夏2〜3か月滞在して調査を行ったカロニ村もそのような石工村の1つである。⁽⁷⁾ 今日カロニ村は、県庁所在地である Γρεβενά^{グレヴエナ} 町から車で1時間ほどの道のりで、週3本のバスでもつながっているが、戦後しばらくまでは、町まで7時間かけて歩いていくようなところであった。そんな辺鄙な場所にも関わらず、標高1000メートルの山の急斜面に密集して建っている約100戸の家は、いずれも2〜3階建ての立派な建物で教会も広場もよく整備されており、小さな町とでもいえそうな雰囲気をもっている。

このあたりは、他のギリシャ北部同様1912年までオスマントルコの支配下にあり、山賊達やアルバニア兵らが頻繁に村を襲っては略奪の限りを尽くすという状態が長く続いていた。カロニ村もしばしばその被害を受けてきたが、19世紀後半から人口が急増し、ギリシャの支配下に移ってから

は、様々な行政機関の支部が置かれたり週1回市が開かれるなど地域の中心として発展、500人からの人口を抱えるまでにいたる。だが、第二次世界大戦とそれに続く内戦で村の人口は激減、過疎化の一途をたどった。そして今日では、町で生活している旧住民が夏を中心に大量にやってくる典型的な避暑村となっている。⁽⁸⁾

さて、カロニ村はトルコ支配下時代大幅な自治を認められ、村長を中心とする自治組織と神父を中心とする教区委員会の2つが村の公共活動を行う公の機関となっていた。⁽⁹⁾ ギリシャ支配下に入るとその活動に様々な制限が加えられたが、いずれの組織も基本的に大きな変化を被ることなく今日まで存続している。⁽¹⁰⁾

このような公の機関の他、カロニ村では古くからシロゴスが公共活動に重要な役割を果たしてきた。その主な活動内容は、かつて教区委員会が中心となって関わっていた、広場や泉といった公共空間の整備や教育の管理で、とりわけ前者は、村につくられた6つのシロゴスすべてが多かれ少なかれ手を出している。この他、人々の娯楽や啓蒙をめざす文化的な活動も行われ、シロゴスによってはこちらが主要な活動分野となっている。活動の基盤となる財源は、会員達から集めた会費や催し物での収入、および県からの助成金からなっており、人々の支持を失うと財政難から活動停止に追い込まれることが多い。次にこれら6つのシロゴスに関して簡単に紹介しておこう（表1参照）。

1904年につくられた村で最初のシロゴスはアメリカ在住者の手によるもので、その当初の目的は、今まで教区委員会が担当していた教師の給与の支払いを肩代わりすることにあった。⁽¹¹⁾ その4年後に村の住人達によってつくられたシロゴスも同じ活動目的を持っていたが、1914年に学校教育が政府の管理下に移り教師の給与を支払う必要がなくなったため、いずれのシロゴスも公共空間の整備、美化に目的を変更している。1908年誕生のシロゴスに関する記録はほとんど無く、詳しいことはわからない。しかし、時とともにメンバーのほとんどが女性になっていったため、1920年女

表1. カロニ村のシロゴス

年 代	名 称	備 考
1904	Φιλεκπαιδευτική αδελφότητα Λουντζιωτών 《'Αγιος Νικόλαος》 教育を目的とするルンジ人* の会「聖ニコラオス」**	アメリカで結成
1908	Φιλεκπαιδευτική Αδελφότητα “Ζωοδόχου Πηγής” 教育を目的とする会「ゾオドフ・ピギ」***	後に下記の会へ 再結成
1920	Αδελφότητα Κυριών “Η Ζωοδόχος Πηγή” 女性達の会「ゾオドフ・ピギ」	1940年頃 自然消滅
1926	Προοδευτική Ένωσις Νέων Καλλονής カロニの若者達による進歩的連合	同 上
1972	Σύλλογος Καλλονιωτών “Ο ‘Αγιος Νικόλαος” カロニ人のシロゴス「聖ニコラオス」	活動中
1982	Εκποραϊκός και Επιμορφωτικός Σύλλογος Γυναίκων Καλλονής Γρεβενών グレヴェナ県カロニ村の 女性達による村の美化と教養向上をめざすシロゴス	同 上

* 村の古名。ギリシャ語名でないで、1926年に法律に基づき、他の多くの村と共に改名。

** 村の教区教会にさげられた村の守護聖人。一般には船乗りの聖人として知られるが、このあたりでは旅の守護者。

*** 文字通りには「命を与える泉」で聖母マリア (Παναγία) をまつた教会の名。病いによくく泉がある。

性のシロゴスとして再結成された。このシロゴスは、もともと村の女達が交代でやっていた墓地や泉、教会などの清掃の順番でもめごとがおきないようにするためつくられたのだという。しかし一時期は、泉に東屋風の建物を建てたり、貧しい家族に小麦粉を支給するといった盛んな活動を行っていた。1926年につくられた若者のシロゴスは、他のシロゴスと違いかなり啓蒙色の強い文化活動に重点を置いていた。たとえば図書室を設けたり成績優秀な生徒を表彰する、村に郵便局や裁判所の支部を誘致する、医師の回診を求めるといった活動をてがけている。⁽¹²⁾

戦前につくられたシロゴスは、1930年代頃から活動が鈍っていき、40年代に入るとアメリカ在住者のシロゴスを除き自然消滅してしまった。しかし、避暑村化の始まる70年代になると、まずアメリカ在住者のシロゴスが

活動を再開、村でも2つのシロゴスが新しく誕生する。1972年結成のシロゴスは、各地に散らばっているカロニ人の親睦を大きな目的とし、毎冬カロニ人の多い町でダンスパーティーを開催したりしているが、近年は村の公共空間の整備が中心となっている。一方1982年につくられた女性のシロゴスは、文化的な活動を重視し、古い民具を集めて博物館をつくったり伝統食を持ち寄って共食を楽しむ祭を企画する、遠足や講演会を開く、新聞を発行するなど盛んな活動を行っている。

さて、カロニ人達は他村との対比の中で、「自分達は町風で進歩的だ」(*είμαστε πολιτισμένοι και προοδευτικοί*)と自らをとらえている。まわりの村が「整えられていない村」(*Κουτσοχωριά*)なのに対し、カロニ村は昔から、地域の中心となっている他の大きな村同様に教育を重視し、清潔を尊び、⁽¹³⁾ 新しい物を取り入れるのに熱心だった。昔からシロゴスが盛んなのもそのせいだ、といって自慢している。彼らは、他村に対するカロニ村の優位を表す「進歩的」とか「町風」といった価値とシロゴスを結び付けてとらえているといえる。だがシロゴスに対するこのような態度は、外に対してのものであり、村内には、シロゴスのめざす村のあり方に対し否定的な見解をもつ人々も多くいた。次の2章では、カロニ人が自分達自身の内部に設けている人々の分類に注目し、それとシロゴスをめぐる支持や反発の動きとの間にどんな関連が見出されるか、という点から話を進めていく。

II

戦前までカロニ人を分類する重要な指標は職業で、個々人に対しての他、家単位⁽¹⁴⁾でも用いられた。まず、19世紀末にアメリカ移民が始まる以前の状態について簡単に述べておこう。

人々の記憶やいくつかの資料によれば、⁽¹⁵⁾ 当時のカロニ村は牧畜関係者(*τζιομπαναράι*)と石工達(*μαστόροι*)からなる村であつたらしい。その頃はまだ農業が盛んで、どの家もかなりの食料を自給できたという。その不足分を補うための基本的な収入源が、牧畜と石工仕事とされてきたの

だった。牧畜でそれなりの収入を得るにはある程度の数の家畜を持つ必要があるが、村では500頭以上の家畜を持っている者を^{ツェリガス} τσελιγκας⁽¹⁶⁾ とよんで裕福な家とみなしていた。一方家畜で食べていくあてのない者達は、ほとんど全員が10歳前後から父親やおじなどに連れられて石工見習いの生活に入っていた。石工の多くは、比較的村の近くで短期間の仕事を行うのが普通であったが、中にはコンスタンチノーブルなど遠くの町に長期間滞在して稼ぎのいい仕事をしていた者もあり、⁽¹⁷⁾ ツェリガスと並ぶ裕福な家とみなされていた。

その他、安定した収入と指導的な地位を得られた者に神父がいる。神父になるにはそれなりの才能が必要だが、古くは神父は特定の家からのみ出していたという。今日どれがそのような家なのか人々の間に見解のずれがあるが、19世紀始めから今世紀にかけて活躍した6人の神父は、3つの家から出ていた。

なお、村を構成していた家々はすべて畑を持っていたが、19世紀末に村に入ってきた次にあげる2つの家はまったく畑を持たず、また特殊な職業についていた。1つは、嫁ぎ先の村から戻ってきた女性の連れ子の開いた家で、第二次世界大戦で離村するまで雇われ羊飼をして食べていた。もう1つは^{ヤフトス} γαφτος と呼ばれた鍛冶屋で、他に祭の時など音楽を演奏して収入を得ていた。⁽¹⁸⁾ カロニ村では彼らをカロニ人とみなしているが、他の家々に比べると特異な位置に置かれていたようである。彼らも第二次世界大戦中に村を去っているが、今でも祭のさいには演奏しにやってくる。

この状況は、アメリカ移民の開始によって大きく変化した。村で最初に渡米したのは、そのほとんどが、神父を出していた3つの家や遠隔地で働いていた裕福な石工達の家のもので、牧畜で食べていた家からは少なかった。彼らは資金力があり外の生活に慣れていたこともあって、その多くが早くから成功する。今世紀に入ると一般の石工達を中心に多数の者がアメリカに渡り始め、鉄道工事や鉱山、後には成功者の店などで働くようになった。中には病気になったり借金を作ったりと悲惨な状態で帰国した者もいた

が、大多数は数年滞在して小金をため、その後は再び石工など昔の仕事に戻っていった。しかし、一部は10年20年と滞在して村に残した家族に送金しながら一財産築き、早くからアメリカに渡って成功していた昔から裕福だった家々とともに *Ἀμερικάνοι* (アメリカ人) と呼ばれる新しいカテゴリーを形成する。1921年以降、移民を制限する法律がいくつも制定され状況が厳しくなると、アメリカニの中には村の家族を呼び寄せて村を完全に引き払う者もいたが、多くは20年代半ばを中心に家族のもとに帰ってきた。

彼らは様々な投資を積極的に行い、村によらず屋や肉屋、コーヒー店を開いたり、⁽⁹⁾ 小麦の商いを始める、町にアパートを買って家賃を得たり宿屋を経営する、製粉所をつくるといった具合だった。中には村の畑を増やしたり家畜を得て人に放牧させたりした者もいたが、そこから大きな利益を得ることはなかったようである。アメリカニの家の子供達は、他の家の子供達同様その大半が石工の技を身に付けたが、中には見習いに出る代わりに父親に連れられてアメリカに渡る者も結構いた。また子供に教育を与えて、教師や役人など給料をもらえる職につける親も他の家に比べるとずっと多かった。

彼らは食料の自給に力を入れず、畑を耕しても、よくて数ヶ月の小麦を賄えるぐらいの収穫しかなく、中には耕作を放棄したり、親から家を分けてもらうとき畑をほとんど受け取らなかった者もいた。彼らにとってトウモロコシ粉入りのパンは貧乏人の食物で、⁽²⁰⁾ とりわけゆとりのあった者達は、日曜日ごとに家族全員で着飾って村の中を散歩し肉料理を食べるといった「町風」な生活を営んでいた。こうしてアメリカニは、経済的に有利な立場を築いただけでなく、村の公職にも積極的に関わり、戦前に活躍した神父や村長は皆、本人もしくは家族がアメリカで成功したアメリカニであった。

では、アメリカニはシロゴスとどんな関わりを持っていたのだろうか。すでに述べたように村の最初のシロゴスはアメリカ移民の手によるが、この時中心となって動いた3人兄弟の父親は、コンスタンチノーブルで長く

働いていた石工であった。兄弟達は、19世紀末から約25年アメリカに滞在し、内1人だけが村に戻って家を継ぎ、息子を神父にしている。一方、女性および若者の両シロゴスでイニシアチヴをとった人物を出した家も、上に述べた家と同様コンスタンチノーブルで働いていた石工の家であった。その息子は、アメリカで神父として働き現地のシロゴスでも活躍していたが、村では、妻が女性のシロゴスを、そして息子が若者のシロゴスを結成している。この一家は、1930年に全員でアテネに移った。

戦前のシロゴスで他にどんな人物が積極的に参加したのか、はっきりしたことはわからない。だが、わずかに残っている記録にみられるシロゴスの主要メンバーの名前によると、女性シロゴスでは12人中10人、若者のシロゴスでは6人中5人が、当人や夫、もしくは父がアメリカで成功、現地のシロゴスでも中心的な役割を果たしていた。またその中には、現役の神父が2人と6人の村長経験者およびその家族が含まれている。こうしてみると、戦前のシロゴスを支えていた人々は、アメリカニを中心とする村の有力者層といえることができる。

アメリカニが村で大きな力をもっていたこの頃、石工や牧畜関係者はどんな立場に立っていたのであろうか。村の大多数を占めていた石工達は、1910年代半ばからその主な仕事先を大きく変えていった。すなわちそのころから夏の農繁期を中心に平野部で仕事をし、村には冬の数ヵ月しか滞在しない生活が定着するようになったのである。とりわけ20年代後半からは、タバコ栽培で景気のよかったトラキア地方⁽²⁾が重要な仕事先となり、多くの石工が長期にわたっていい収入をあげるようになっていた。こうして農作業はもっぱら女の仕事とされ、食料の自給率が低下するが、アメリカニとちがって、自給率の高かったトウモロコシを小麦の代用とするなどして小麦の購入量を減らす努力をしていた。しかし、もう1つの基本的な食品である乳製品は、アメリカニ同様そのほとんどを村内や近隣村の牧畜関係者から購入していた。石工達がシロゴスの活動に対しどんな反応を示していたのか、今となってはうかがいようがない。だが、広い地域をまわ

り町の生活に触れる機会が多かった上、村の土地にあまり依存せずとも外部からの収入で食べていけたという点で、シロゴスを支えていたアメリカニと近い立場に立っていたといえよう。

それに比べると牧畜関係者の立場は、かなり異なっていた。1920年代9戸の家が牧畜で食べていたが、そのうち8戸はかつてのツェリガスの家の子孫である。だが、500頭ほどの家畜を持っていれば多いほうとされ、経営規模はどんどん小さくなっていった。さらに30年代も半ばになると3戸の家で牧畜を自分の代でやめ、子供達全員に石工の道を歩ませている。彼らは牧草地を借りたり、穀物飼料や新しいチーズ作りの機械を買ったりと、かなりの投資を行わないと食べていけなかったため、生活の基本的な部分に収入をまわすことを極力控えてきた。彼らは多くの家財を持っていることで人々から裕福な家とみなされたが、その生活は、有力者達の尊ぶ「町風」な生活とは正反対なものであった。

この、「進歩的で町風」な村を求めているアメリカニを中心とする人々と、村の土地に依存し自給を重視する牧畜関係者との間にあった違いは、若者のシロゴスが1930年頃に開始した緑化運動をきっかけに、いっきに緊張の度合いを高めてしまう。この運動は、植林だけにとどまらず居住区周辺での放牧禁止を強く求めたのだが、その当初からいろいろないやがらせや悪い噂が流されて会員が次々と離脱、あっというまに100人近くいた会員が10数名に減り、その後シロゴスは活動らしい活動もせず自然消滅してしまった。⁽²²⁾ その後、他のシロゴス活動も下火になり、アメリカニや石工達が次々と離村、戦争をはさんで村は大きく変化していくことになる。

Ⅲ

カロニ村は、第二次世界大戦時ドイツ軍による焼き打ちだけはまぬがれたが、その後の内戦では共産党軍に占領され、多くの村人が政府軍との争いの中で殺されただけでなく、どちらを支持するかで家族が真っ二つに分かれるなど悲惨な状況に置かれた。政府軍は、1948年に村を手中におさめ

るやいなや、共産党軍への協力者を出さないよう残っていた村人全員を強制的に立ち退かせ、戦争が終結する50年まで村を完全な無人状態のまま放置した。⁽²³⁾ 追い出された村人達は、親族同士でまとまって平野部のいくつかの町に分散するが、多くの場合、一家の働き手が現地ですでになんらかの仕事を得ていたところに身を寄せる形であったため、早くから町での生活基盤を築き上げることができた。そうして、強制立ち退きが解除されたあとも、多くはそのまま町での生活を続け、村に再び戻ってきたのは戦前の約3分の1、150人前後に過ぎなかった。しかし、すっかり荒れはててしまった村での生活再開はむずかしく、せっかく戻ってきた村人達も次々と再び平野の町に降り、教師や公務員など村に仕事を持っていた者も、60年代から70年代にかけて村の公共機関が次々と閉鎖されるに及んで村を離れていった。こうしてカロニ村出身のアメリカ在住のジャーナリストが1964年に村を訪れた時、人の住んでいた家は30戸、ほとんどの家が半分こわれかけ、道は草に埋もれているような状況だったという。⁽²⁴⁾

一方村を離れた人々は、テサロニキなどギリシャ北部の町に集まって住み、その多くは建築関係の仕事や工場に勤めて食べていた。戦前まで子供に教育を与えた家は限られていたが、戦後になると男女を問わず教育を与えて教師や医師、公務員などにすることが人々の理想となり、実際多くの者が大学に進学している。彼らは、一部を除いて村にはほとんど戻らず、家を荒れるがままにしておいたが、70年前後から再び村に戻って家を直し、年金を頼りに村での生活を再開する者が増えていった。そのほとんどは、町に家を確保したまま夏の間だけ村に滞在しており、町の家を完全に引き払った者は数えるほどしかない。彼らのもとには、真夏になると子供や孫が大勢押し寄せるようになり、村は避暑村としての色合いを深めていった。

このような状況下、カロニ人を二分する新しいカテゴリーが生じてきた。すなわち、戦後も村で生活が続けてきた ^{ντόπιοι} (現地人) と、村に一時的に滞在する ^{επισκεπτες} (訪問者) である。時とともにドピの数は減少かつ

高齢化しており、筆者が村に初めて入った1987年にドピとみなされた家は10戸23人、内4戸が牧畜で食べ、その中のただ1戸だけがまだ若く、家族5人全員で牧畜に従事している状態であった。⁽²⁵⁾ それに対するエビスケプテスの正確な数をはっきりさせることはできないが、ほとんど毎夏やってくる常連は、住める状態にある102戸の家のうち76戸、約400人に達している。

さて、ドピとエビスケプテスの間には、戦前アメリカと牧畜関係者の間にあったのと同じ質の対立関係が存在している。避暑にやってくるエビスケプテスにとって、村は清潔で静か、古き良きものをよく残してある場であってほしい。ドピのつくった機能第一のトタン張りの家畜小屋やブタ小屋からの悪臭、道を汚す家畜の糞をなんとかできないものかと悩む。全員参加の村会⁽²⁶⁾ が開かれるたびにこの問題が取り上げられ、さかんなやりとりが展開される。ドピはそんな文句は無視し、逆にエビスケプテスの増加によって深刻化した夏の水不足にいらだちをつのらせている。⁽²⁷⁾

エビスケプテスが増える前、村の公職は、村内に仕事を持っていたかつての有力者の家の出身者達によって占められていた。やがて彼らは村から離れ今度はエビスケプテスとして戻ってくるようになるが、その頃から計15年間は、かつてのツェリガスの家の出身で自らも戦後牧畜で食べてきた人物が村長を勤めてきた。しかし、彼も途中から牧畜を放棄してグレヴェナ町に家を持ち、村と町の間を頻繁に往復する生活をするようになっていった。そして、90年には、かつての有力者の家の出身者で、戦後すぐからエビスケプテスとして村にやってきた人物が新しい村長に選ばれている。一方、ドピの中核となっている牧畜関係者は、村の評議員となって自治組織に実質的な影響力を及ぼしている。

さて、戦後のシロゴスは、避暑村化の中エビスケプテスによってつくられている。その結成で中心的な役割を果たしたのは、いずれも戦前のシロゴスで活躍した家の出身者で、とりわけ女性のシロゴスは、かつての女性シロゴス結成者の息子で若者シロゴスの結成者であった人物の妻の主導権

でつくられた。教師や医師など高学歴者達は全般にシロゴスに高い関心を示しているが、その中でも結成者と緊密な連絡をとりながらシロゴスの運営に直接かかわっているのは、その多くがかつての有力者の家の出身者達である。

2つのシロゴスのうち、最初にできた方は、とりわけ女性会員のほとんどが女性シロゴスに移ってしまった82年以降、存在感が急速に薄れてしまった。今でも会費や寄付という形でシロゴスに参加する者は結構いるが、みずから積極的に活動に参加しているのは、結成当時から中心的な役割を果たしていた10人前後にすぎず、ドピの関心も低い。それに対し女性シロゴスの方は、支持者や関心を抱いている人々の幅が広く、様々な娯楽の場のみならず、総会といった場にも結構ドピが顔を出している。

シロゴスは、いずれもエписケプテスを支持基盤としているが、すでに述べたエписケプテスとドピの間の対立に直接かかわって、エписケプテスの利害を代弁するといったことは避けている。村の自治組織やシロゴス同士の間にはいろいろと反目もあるが、しばしば共同で出費をして事業をおこなっており、とりわけ夏の水不足解消のため新たな水源を確保する工事では、3者が積極的な協力体制を組んでいた。

さて、人々はカロニ人の間に $\delta\epsilon\iota\kappa\iota\cdot\mu\alpha\varsigma$ (身内) と $\xi\epsilon\nu\omicron\iota$ (よそ者)⁽²⁰⁾ という区別を設けてきた。前者は、父方、母方のいずれかを通してカロニ村出身者と認められる者で、村に実際住んでいるか否かは問われない。それに対しクセニは、カロニ村以外の出身者で、ディキ・マスと結婚した者はカロニ人として扱われるものの、その身分は一生クセニのままである。ディキ・マスと婚姻関係をもたずに村に住んでいるクセニは、カロニ人とも認められないのが普通だが、それでも2代3代と住み続けると、その間、ディキ・マスと一度も婚姻関係がなくてもディキ・マスのカロニ人とみなされてきた。戦前まで、カロニ村は村内婚率が非常に高かったため、クセニのカロニ人が全体に占める割合はきわめて小さく、カロニ人とディキ・マスはほとんど同意語扱いであった。ところが、戦後に入ってクセニ

との婚姻が大多数を占めるようになり、この状況が大きく変化、両者の間に緊張関係が生じるようになる。⁽²⁹⁾

戦後にできた2つのシロゴス、とりわけ女性のシロゴスはこの点で重要な役割を果たしている。最初にできたシロゴスは、カロニ人をディキ・マスとその配偶者とし、いわば昔からの規定にのっとってクセニを位置づけた。ところが、シロゴスで活躍していたメンバーの妻のほとんどがクセニであり、彼女達は何かというクセニとして付け足しの扱いを受けることに不満をつのらせていった。そうして、ついにそこから分かれるようにして女性のシロゴスを結成する。彼女達は、会員の資格者をカロニ村にかかわるすべての女性とし、ディキ・マスとクセニの区別を越え、カロニ村を愛する人すべてをカロニ人としようと主張し始めた。そして村の民俗に注目し、⁽³⁰⁾それを共有することによって新しいカロニ人のアイデンティティーの拠り所にしようと考えている。しかし、この方針がすべてのカロニ人の支持を得ているとは言いがたい。この問題をめぐって、ディキ・マスとクセニの間の緊張をいっきに高めたトラブルを次に紹介する。

このトラブルで中心になっているのは、女性シロゴスのナンバー2の妹である。彼女自身も、すでに亡くなっている夫もカロニ出身者ではないが、村が気に入って家を建て毎年長期にわたって滞在、またシロゴスにも積極的に参加している。シロゴスは、彼女をカロニ人として扱い役職にもつかせていたが、多くのカロニ人にとって、ディキ・マスの妻でもないのに彼女をカロニ人とするのは抵抗感があつた。加えて彼女が未亡人らしくらぬ派手な服や行動をとっているのが災いした。⁽³¹⁾人々の不満の矛先は、シロゴスではなく彼女個人に向けられ、悪い噂が流されたり家の一部が壊されるなどのいやがらせが、ここ数年ひどくなっている。それに対し、シロゴスは総会のたびに彼女をカロニ人であることを確認しているが、88年には、創立以来変更のなかったクセニ主体の首脳陣を引退させ、ディキ・マスの若い世代を表に立たせることによって妥協をはかっている。

クセニとの対比の中で、ディキ・マスは互いに本当のカロニ人 (*γνήστοι*

Καλλονιώτες) という一体感を抱いているが、もともとディキ・マス同士を強く結び付けていた、村での生活体験の共有が希薄になっている今日、クセニのようなディキ・マスが増加しているという認識が人々の間に強くなっている。女性のシロゴスのやることを「クセニのくせに」(Τι κάνουν οι ξένες;) と非難している者が、いつ他のディキ・マスから「クセニみたいな」(σαν ξένος) といわれるかわからない、というのが現状である。さらに最近では、母親を通してのみカロニ村のディキ・マスとされている者¹²⁾が、若い世代を中心に、カロニ村よりも父親の出身村のほうに強いアイデンティティーを持つ傾向が認められる。今後、クセニの父親をもつ子供がますます増加することが予想され、それとともにディキ・マスの概念も大きく変わっていくかもしれない。

戦前、アメリカニを主体としたシロゴスがめざしたのは、「進歩的で町風」な村であり、その基準からみて「後進的」(καθυστερημένα) とされた牧畜関係者との間に対立を生み出していた。戦後は、エписκεπτεςと牧畜関係者を中心とするドビとの間の関係に、この対立が反映されている。さらに、他村との対比が問題になると、アメリカニやエписκεπτεςの村の理想がカロニ全体を代表し、牧畜関係者やドビにとっての村は、周辺の「劣った」村々のイメージと重ねられている。

だが、この対立関係は避暑村化の中で弱まっており、今日ではカロニ人のアイデンティティーを根本から揺さぶるようなディキ・マスとクセニの対立が大きくなっている。こうして、かつてあったディキ・マス＝カロニ人、クセニ＝他村人という構図がもはや成立しなくなってしまったし、さらには、ディキ・マスの概念そのものも解体し始めている、というのが、現在カロニ村の置かれている状況といえよう。

今回、筆者の能力不足から触れなかったが、シロゴスの活動が中央政府レベルでの政治変化や、全国的な思想運動などと強い結びつきをもって展開してきた点に関して、今後深く掘り下げていく必要があるだろう。

注

- (1) Dubisch, J., "The City as Resource: Migration from a Greek Island Village", *Urban Anthropology*, Vol.6(1), 1977, p.79.
- (2) Banfield, E., *The Moral Basis of a Backward Society*, Free Press, New York, 1958. これは、イタリアの事例に基づいて書かれているが、ギリシャの社会でも基本的に当てはまる。たとえば、Du Boulay, J., "Amoral Familism and the Image of Limited Good: a Critique from a European Perspective", *Anthropological Quarterly* 60-1, 1987, pp.12-24.
- (3) たとえば Campbell, J., *Honour, Family and Patronage*, Clarendon Press, Oxford, 1964, pp.214-16.
- (4) Vermeulen, H., "Urban Research in Greece", In Kenny, M. & D. Kertzer (eds), *Urban Life in Mediterranean Europe, Anthropological Perspectives*, University of Illinois Press, Urbana, 1983. pp.109-132.
- (5) たとえば, Dubisch, J., *op.cit.*, p77., Sutton, S., "Rural-Urban Migration in Greece", In Kenny, M. & D. Kertzer (eds), *op.cit.*, p.242.
- (6) 最も公式な意味でのカロニ人は村に名前を登録してある者で、登録簿(*δημοτολόγιο*)は、村に公務員の資格で勤めている書記によって管理されている。子供は原則として父の登録先に名前を登録し、女性は結婚のさい夫と同じ登録先にするか父のもとにとどまるか選択を行うことになっている。この登録簿に基づいて様々な書類の発行や、村から国家レベルのすべての公職の選挙・被選挙権が与えられる。しかし、登録先の変更は非常に面倒なため、村との縁がほとんど切れてしまった者が登録簿に名前を連ねているかと思うと、村に生業をもつなど、はたからみると一番村人らしい者が他の地に登録をしているというような状況になっている。
- (7) 本調査は、ギリシャ政府奨学金制度の援助を受け1985年12月から90年1月までテサロニキ大学に籍を置きながら行った。村に滞在しての調査は、基本的には人の多い夏場に行い、それ以外の季節は各地に散らばっているカロニ人の家を訪れる形をとった。この場を借りて、今は亡きキリアキドゥ＝ネストロス教授、大学の民俗学研究室の皆さん、そしてカロニ村の人々に感謝の意を表します。
- (8) *παρθεριστικό χωριό* と呼ばれる避暑村の現象は、今日多くの山岳地帯に見られるが、カロニ村の近くにもいるアルーマニア系のクツォヴラヒ人や一部のギリシャ系羊飼達は、昔から夏の間だけ過ぐす村を山間部にもっていることで知られている。クツォヴラヒ人については、Thompson, M. & A. Wace, *The Nomads of the Balkans*, Methuen & Co Ltd, London, 1972 (1st. ed. 1914).
- (9) 山岳地域や島など農業に適さなかった地では、*κεφαλοχώρι* と呼ばれるかなりの自治を認められたキリスト教徒の村が多かった。カロニ村は18世紀末から19世紀初めにかけてだけ、周辺の村々とともに大地主の領地となっている。Vacalopoulos, A., *History of Macedonia 1354-1833*, Institute for Balkan Studies, Thessaloniki, 1973, pp.496-497.

- 00 今日自治組織(κοινότητα)は、村長、副村長各1人、評議員5人からなっており、4年ごとに選出される。主な仕事は、中央との連絡や道路、水道の整備といった公共事業で、人々の間の様々な苦情(土地の境界争いなど)の解決にもあたっている。一方、教区委員会(ενοριακή επιτροπή)は、神父と、彼が推薦して府主教の承認を得た2人からなり、今日では教会の一般雑務にのみ携わっている。
- 01 コンスタンチノーブルに石工を多く出してきた村では、19世紀末に現地の石工達の間でシロゴスが結成されており、その主要な活動目的は、教師への給与支払いなど教育に重点が置かれていた。Παπαδόπουλος, Σ., *Εκπαιδευτική και Κοινωνική Δραστηριότητα του Ελληνισμού της Μακεδονίας κατά τον Τελευταίο Αιώνα της Τουρκοκρατίας*, Thessaloniki, 1970, pp.185-86.
- 02 シロゴス活動についてまとまった研究がないため、詳しいことはいえないが、ギリシャ各地にこの時期きわめて内容の類似したシロゴスが作られていたようである。たとえばペロポネソス半島の村については、Ρουμεριότης, Π., *Η Μπαρμπέτσα και η Σκούρα της Λακεδαιμονος*, Athens, 1983, p.123.
- 03 清潔(καθαριότητα)は、カロニ人がもっとも尊んでいる価値の1つで、たとえば良き主婦(καλή νοικοκυρά)なら常に心掛けておくべきものとされている。他村との対比で、彼らが自分達の清潔度の高さを示すためによく例にあげるのが、週1回必ずからだを洗ったということで、この点、つい最近まで洗礼の水を流さないようからだを洗うのを極力避けていた老女のいた隣の牧畜の村と比べ、清潔観の違いを指摘できよう。
- 04 ここで家と訳した言葉 ^{σπίτι}σπίτι は、建物の他、畑などの家財やそれに帰属する人々も含んだ社会的、経済的単位をさしており、関係者の間で分割され増えていくものと考えられている。
- 05 カロニ村に関して参照した文献は、Τζημουράκας, Χ., *Καλλονή Νονού Γρεβενών*, Thessaloniki, 1979, Γρηγορίου, Ε., *Ιστορία του Χωριού Καλλονής-Γρεβενών* (1950年に手記の一部をタイプにしたもの), Σύλλογος Γυναίκων Καλλονής, 1987 (新聞), 近隣の村々に関しては, Τζιούφας, Σ., *Το Δίλοφο Βοίου*, Thessaloniki, 1977, Τζώρτζης, Β., *Μορφή, το χωριό, μου*, Thessaloniki, 1979, Παπανικόλαος, Φ., *Ιστορία του Κριμνίου*, Thessaloniki, 1959 を特に参照した。なおⅡ章Ⅲ章の主要内容は、19世紀末頃村にあった約100戸中39戸について、その後の展開過程について集めた資料に基づいている。
- 06 大規模経営を行っている牧畜関係者への敬称
- 07 このあたりの石工村では、コンスタンチノーブルで働いていた石工が非常に多く、村によっては現地に同業者組合をもつほどだった。彼らは、村の中ではコンスタンチノーブル人(Πολίτης)と呼ばれるカテゴリーを形成していたが、カロニ村の場合は数が少なく、そこまでは至らなかった。
- 08 このような仕事にもっぱらっていたギフトスと呼ばれる人々は、カロニ村だけでなく西マケドニアやエピルス地方を中心に多く散らばっており、しばしば差別を受けてきた。

- 19) ^{καφένείο} の名で知られるギリシャのコーヒー店は酒も置いてあり、今でも原則として男達だけの社交場である。カロニ村にコーヒー店ができたのはこの時期で、戦前まで広場に2つの店があった。今日ではよろず屋を兼ねた店が1つ残っているだけである。
- 20) このあたりでは、貧しい家でも小麦粉だけで作ったパンを普段口にしていた。それに対し小麦の産地では、小麦のパンを贅品とし、トウモロコシ粉入りのパンを経済的で栄養面でも優れているとしている。Λουκόπουλος, Δ., *Αιτωλικαί Οικήσεις, Σκευή και Τροφαί, Δωδώνη*, Athens, 1984 (1st.ed. 1925), p.107.
- 21) 当時トラキア地方は、共産主義系の農民運動や労働者運動が非常に盛んであった。Vermeulen, H., "Conflict and peasant protest in the history of a Macedonian village, 1900-1936", *Επιθεώρηση Κοινωνικών Ερευνών*, numéro spécial, 1981, pp.93-103
- 22) 同じような対立が近くの村でも報告されている。Συντακτική Επιτροπή, "Προοδευτική Ένωση Πυρσόγιανης", *Αρμολόι*, 10, 1980, pp.66-67.
- 23) カロニ村では、内戦中かなりの村人が共産党軍に入りゲリラ活動を行っていた。その多くは終戦直前ソ連や東欧諸国に逃げ込んだが、政情の変化により70年頃から次々とギリシャに戻り始めている。村で夏を過ごす者も増えているが、彼らと他の村人との間には、内戦中の苦い記憶が清算されずに残っており、また生活習慣の違い等もあって深い溝が存在している。
- 24) Παπαφωτίου, K., "Η Ελληνοαμερικανική Σκοπιά", *National Herald* no.29, 1967. 彼はこの記事でアメリカ在住のカロニ人に村の窮状を訴え、アメリカのシロゴス活動の再開を呼びかけている。
- 25) 筆者が調査していた3年の間に、老夫婦だけでやっていた牧畜関係者の家3戸は引退したり、その準備を始めていた。
- 26) 村会は、村に人が一番いる7月下旬から8月上旬の適当な日に広場で開かれ、登録簿に記名してあるか否かは問わず誰でも参加し発言できる場となっている。しかし、当人も配偶者もカロニ出身者ではないよそ者にたいしては、村会の開催日に関する情報が積極的には流されないようである。
- 27) 村は、上と下の2つの居住区 (μαχαλάς) に分かれているが、水は下の居住区の一部にしか行き渡らず、牧畜関係者の住んでいる上の居住区は、夏中ほとんど水のない生活を強いられている。戦前まで村では、謝肉祭の最後の日に上下それぞれの居住区で子供達がかがり火を焚いて互いの美しさを競い合う行事が行われていたが、今日の水不足は、上と下の居住区間の対立のかたちでしばしば表現されている。
- 28) これらの言葉は使われる文脈によって意味が異なり、親族と非親族を表すこともあれば、ギリシャ人と外国人を意味することもある。この点について詳しくは、Herzfeld, M., *The Poetics of Manhood*, Princeton University Press, Princeton, 1985.
- 29) カロニ村では、登録簿を始め婚姻や出産、死亡届け等の書類がすべて内戦中に燃えられてしまったため包括的な統計資料を扱う上で困難があるが、通婚圏の資料として

は主にインタビューに基づいて計359例を集めることができた。その内訳としては、1900年頃から1940年代までの174例中村内で配偶者を得たのは111例、村外に婚出したもの28例、村外から配偶者を得たもの35例（内5例が入婿）となっている。一方1950年から1989年までの185例をみると、村内婚はわずか16例で、残りの169例では配偶者を村外から得ている。

- ㉓ 女性シロゴスが最初に手がけた大仕事は校舎を博物館にしたことで、古い衣装や手芸品、台所用品等が主要な展示品となっている。また、伝統食を持ち寄って共食と踊りを楽しむイベントでは、各家で嫁と姑、娘と母が協力しあいながら昔から祭りに欠かせない様々なパイや、とりわけ出産後乳の出をよくするとされるパンの一種が作られる。シロゴスはまた、このイベントのために民族衣装を揃え少女達に伝統的な踊りを教えることもしている。カロニ村では、戦前まで気の合った者同士で互いの家を回り手芸などをしながら冬の夜を過ごす習慣があったが、それに則る形でシロゴスの主要メンバーの家を開放し村の女性達全員を招待するといったことも行われている。
- ㉔ ギリシャ正教では、未亡人に対し最低3年間、黒い服を身につけて喪に服することを求めているが、村を中心に、未亡人は再婚するまで一生黒をまとい、派手な行為を慎むべきという考えが今でも非常に強い。
- ㉕ このあたりでは、女性は、原則として親の家を継ぐ権利を持たず、結婚時に衣服などの持参財 (προίκα) を受け取って夫の家に入った。娘しかないといった状況では、入り婿 (εσώγαμβρος) を迎えたが、その場合、男性はディキ・マスだろうがクセニだろうが、妻の家以外には自分の家を持たなかった。ところが、戦後、女性にも家財を分ける法律が村にまで浸透し、多くの男性が、自分の家を出身村に持ちつつカロニ村の妻の家で夏を過ごすようになっていく。

**SOLIDARITY AND DIVISION OF 'VILLAGERS' CREATED BY
LOCAL CHAUVINISM; HISTORY OF REGIONAL ACTIVITIES
OF "SILLOGOS" IN A GREEK MOUNTAIN VILLAGE**

《Summary》

Akiko Uchiyama

In this essay, I investigated the activities of six regional associations called "sillogos" which have been organized in a Greek mountain village Kalloni for the past ninety years. Through the activities of "sillogos", some part of "Kalloniotes" (Kalloni people) have been trying to improve the living condition of their village based upon their ideal image of Kalloni. However, "sillogos" has been met by mixed reactions, even serious objections, reflecting strong oppositions among Kalloniotes and ambiguity of their local identity. Then how has the definition of Kalloniotes changed? How has the category of Kalloniotes changed?

Before the World War II, three vocational categories existed among Kalloniotes: 1) masons, 2) stock breeders, and 3) immigrants to U.S.A. From the 70's on, Kalloniotes began to be divided into another categories: "natives", and "visitors". Besides these categories, Kalloniotes have been consisted of "our own", direct descendants of Kalloni, and "strangers", married to "our own". Today however, the number of "strangers" has increased, and main members of The Women Association, who are almost all "strangers", promote to reconsider the dichotomy of "our own" and "strangers".